

〔古今和歌六帖鳥〕かほどり

夕さればのべになくてふかほ鳥のかほにみえつ、忘られなくに

〔源氏物語四十九寄生〕うちつけにいつのほどなる御ちぎりにかはとうちわらひて、さらばしかつた

へ侍らんとてゐるに、

かほどりのこゑもき、しにかよふやとまげみをわけてけふぞたづぬる、たゞ口ずさみのや  
うにの給を、いりてかたりきこえけり、

〔萬代和歌集十六雜〕河邊鳥といふことを

山河のゐくひにかよふかほよ鳥。かつみるたびに音をのみぞなく

〔現存和歌六帖〕かほどり

信實朝臣

ありとてもまだみもまらぬかほ鳥のいと、霞に空かくれつ、

〔伊呂波字類抄動物〕籠ハコトリ

〔源氏物語三十四若菜〕み山木にねぐらさだむるはこどりもいがでかはなの色にあくべき

〔枕草子三〕鳥は はこどり

〔古今和歌六帖鳥〕はこどり

みやま木によるはきてなくはこ鳥のあけば歸らんことをこそおもへ

春たてば野べにまづなくはこどりのめにも見えすて聲の悲しき

〔新撰六帖六〕はこどり

家良

春されば友まどはせるはこ鳥のふたがみ山に朝なく

〔夫木和歌抄箱鳥二十七〕正治二年百首

小侍従

ふたむらの山の端まらむまの、めにあけぬとつぐるはこどりのこゑ